

ぼくのしゃしん ぼくのおもい

米田 祐二 プロフィール

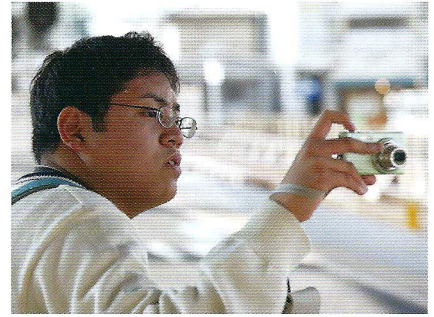


写真は祐二の言葉

自己アピールする行いと言葉の知識を、障害ゆえに獲得することを遠回りした祐二です。この時代、携帯電話にカメラ機能が付き、デジタルカメラの普及で写真が言葉の代弁者になりました。

祐二の写真が、これはなにに？ これはたべもの？ これはだあれ？ 先生？ ともちが？ この色はなに？ お花。草。森。空は青い、あれ赤くなるよ？ 体の色が変わるんだ。尋ねたいことであふれています。手当たり次第に写します。祐二のオリジナルアルバムはとてもおしゃべり。開くとその時の祐二の声が聞こえてきます。でもその時はまだ母にはわからない祐二ワールドでした。朝の食事から始まり、出会う不思議が写真となりアルバムが増えました。毎日アルバムを見る祐二。食べ物や大好きな教師や電車のページを開いています。いつのころからかそれが、祐二の教科書であり日記であり記憶であり会話の媒体であり人とつながるスキルな

んだと、親が、まわりの人が、気づきはじめました。そのことでこちらから祐二にかける言葉が変わり始めました。会話として写真を見るようになれました。言葉のかわりである祐二の写真は説明が必要ないです。見ればわかる写真です。真実です。写真が言葉を持てます。被写体の心をくみとり、その声を写しとることができる祐二の感性が、多くの人の心を打つでしょう。



アマチュア写真家 米田 祐二 (写真:豆塚 猛)



米田 千鶴 (母)

祐二君の魔法

とにかく驚きである。こんな素敵な写真を撮れるなんて、まるで魔法のようである。自閉症の祐二君が撮る写真は全く障がいを感じさせない。障がいがあっても美しいものを美しいと感じる心に違いはないということ以上に素晴らしい写真を生み出す。

祐二君はカメラを持って、毎日毎日二百枚近くの写真を撮っている。毎日お母さんがデータを外付けハードディスクに入れる。私はそのハードディスクから写真をセレクトしたことがある。あるわあるわ、膨大なデータが入っていた。ポップでやさしい写真群たちだ。

祐二君は最初、電車に興味があって電車ばかりを撮っていたという。徐々に興味の対象が広がり、生活全般にレンズを向けるようになる。朝から食事の写真に始まり、バスの運転手、指導員、仲間たち、帰り道の面白いもの、夜は月にレンズを向けて一日が終わるという具合である。写真を通じて確実に世界が広がってきているということだ。

写真という道具で世界を見つめ、感じ、そして世界とつながる力を得た。写真に関わっている者として、こんな形で写真の力を感じる事は実にうれしいことだ。

これからも写真で自分の世界を広げ、写真で世界と繋がって行っていきたいと思う。

豆塚 猛 (写真家)

まめづか たけし

1955 年奈良県生まれ。近畿大学農学部卒、スタジオ助手、情報紙の記者、デザイン事務所のカメラマンを経て 30 歳でフリーカメラマンに。障がい者や障がい者問題に関わる作品・出版物多数。

豆塚さんとの出会いは祐二が高校 3 年生のときです。「祐二君の展示会を」との声が高まり、養護学校の先生方に相談したときに、豆塚さんを紹介していただきました。豆塚さんは祐二の写真を目にするなり「ばくくの知る場所で展示会をしよう」と言われ、初の展示会を開催しました。その後もおつきあいをさせてもらいアドバイスなどを頂いている、とても素敵な写真家さんです。



ぼくのそら (2011年 受賞作品)



希望 (2010年 受賞作品)



空を見上げて (2012年 受賞作品)

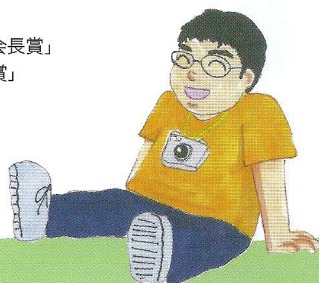
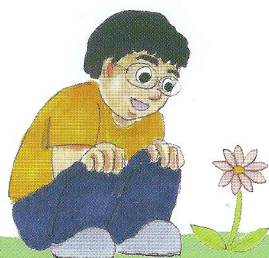
よねだ ゆうじ プロフィール

1991年生まれ 京都府八幡市在住 自閉症

京都府立桃山養護学校の小学部高学年頃より携帯電話のカメラで写真を撮り始め、中学部3年生よりデジタルカメラで本格的に撮影を始める。高等部3年生の時にプロカメラマンの豆塚猛氏に出会い初めての写真展を開催、高い評価を得る。以降、八幡市を中心に写真展を多数開催。現在「エクスクラメーション・ファクトリー」に通所。

受賞歴

2009年「京都とおきの芸術祭	実行委員会会長賞」
2010年「京都とおきの芸術祭	京都府知事賞」
2011年「京都とおきの芸術祭	優秀賞」
2011年「八幡市文化賞	優秀賞」
2012年「京都とおきの芸術祭	佳作」
2013年「京都とおきの芸術祭	優秀賞」



祐二くんの写真

私たちが日記を書くように写し続ける祐二くん。歩きながらバシヤ、動く車からバシヤ。まるで画家のモネのように、その瞬間は二度とないことを知っているような祐二くんです。

花や鳥などすべての被写体に話しかけながら、一度だけシャッターを押します。連写なんてしません。だから、動物たちも心をゆるすのでしょう。

私たちはエゴな写真家とひそかに呼んでいます。

家久 秀子 (養護学校小学部時代の担任)

高等部時代の思い

「あっ、きれい」赤く染まり始めた木の葉をバチッ。垣根の隙間からそっとのぞいて色づいたみかんをバチッ。シャッターを押す祐二君。まるで身体の一部のように、いつもデジカメを首から下げて歩いていた。

3年生では写真を使つての勉強。農園で写したキュウリを見て「おっきい」「へちまみたい」と話し合い、青空をバックに写したサルスベリの木の花を「ひとつ、ふたつ……9、10、いっぱい」とみんなで数えあつたりした。

京都市動物園への校外学習。1人1台デジカメを持って動物を写した。100枚以上写した生徒もいた。感想を言い合い、文化祭にみんなで選んだ写真を展示した。写真を通して友だちとの関係も深まった一年だった。

1人で通学できるようになった頃は、大好きな電車を写す。特急がくればバチッ、出発すれば後ろ姿をバチッ、そしてホームの職員さんもバチッ。時間を忘れ帰りが遅くなりお母さんを心配させることもあつた。

美しいものは美しいと自分の感性で次々と写していた祐二君。これから何千回何万回とシャッターを押し続けることを期待しています。

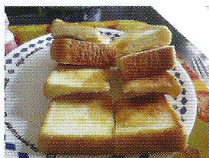
広 泰幸 (養護学校高等部時代の担任)

ぼくの休日

米田 祐二 ミニギャラリー



おはよう、いい天気だね。



こんがりトーストおいしそう。



今日も電車でお出かけ。



おっ、シャッターチャンス！



まずは腹ごしらえ。



みんな楽しそうだね。



ぼくのこと呼んだ？



ソフトクリーム大好き！



ふたりは友だち？



家までもうすぐだね。



野菜も多いぞ。



おやすみなさい、また明日。

ありがとう！！

また、どこかで
ぼくの写真を
みつけてね。



心に響く写真

毎年11月にらくがき寺で、カエ☆たま座禅会が行われます。祐ちゃんの青空を背景にした公孫樹（イチョウ）の黄色が美しい写真は、毎日見ている私の公孫樹より美しく、その写真は見る人の心に響きます。それは彼の心が美しいからなのでしょう。

堀尾 行覚（カエ☆たまスタッフ・らくがき寺単任庵住職）

不思議な写真

祐ちゃんが夕焼けを撮ると素敵な夕焼けになる。見なれた道は洒落た道となる。人をバチリと撮ればその人の気持ちが写っている。不思議だな。何がそこにあるのかしらん。きっと祐ちゃんのハートだね。

甲斐 芳子（カエ☆たまスタッフ）

思いを伝える写真

私は祐ちゃんの写真の中の私の笑顔が好きです。「今日も会えたね」「一緒に時間を過ごせたね」カメラを通してそんな会話をふたりで交わしている気がするから。思いを伝える術はことばだけでないことを、祐ちゃんの写真は教えてくれます。

松本 雅美（カエ☆たまスタッフ）

カエ☆たま（<http://kaetama.web.fc2.com>）

障がいのある仲間たちとボランティアと一緒に様々な体験を重ねています。発足から15年。いつもの仲間と過ごす休日が明日からの元気の種となるように、「カエ☆たま」はみんなの「居場所」であり続けます。

※祐二が小学2年から参加しているお気に入りの居場所です。